材木は凶器になりうるか。

右図のように材木店の看板で「材木」が「栈木」になっているのを見たことはないだろうか。字形構成からすると「木で作った武器か」など思うのだが、材木が立てかけてある風景の中でそのように書いてあれば、「ああ材木って書きたかったんだな」と思いつく。これが 1 件だけでなく結構あちこちの材木店にあって何やら訳ありのような気がする。

聞いてみようとも思ったが、万が一、材木店主と看板業者の間でトラブルを起こすきっかけにでもなったら罪なので、いまのところ自制している。

この字は漢字にはないが、国字にはある。意味は「たら」の木。春に新芽を次々摘み取られててんぷらにされてしまうあの木である。

図形的に近い漢字には「木偏＋伐」という字がある。材木には近い存在の「いかだ」である。でも日本では「筏」と書くのが一般的であろう。

また「杙」がある。こちらは「くい」である。

「栈」は康熙字典にはでてこないが、大漢語林では「弋」の俗字であり、また「材」の俗字であるともいう。

「財」も同じで旁が「戈」と書くことがある。大漢語林ではそれを「財」の誤字としている。ならば「材」の場合も「俗字」ではなくて「誤字」といったほうが正解だろうと思うが「大漢語林」の立場も私と同じくこんなに世間に通用しているようでは「世間に波風を立てたくない」なのだろうか。

では何故「戈」と書かれるのだろうか。楷書の世界では「才」を「戈の点を取った（右図）」形に書くことを許容している。たしかに形状的には「才」よりは「点なし戈」の方が張りがあって元気がよいように見える。そこまではよかったのだが、最後に思わず点を打ってしまったのだろうか。このあたりが真実かも。

ところで「才」の字形だが。「才」は字典では手偏に配されるくらいだから第 3 画は第 2 画の縦棒を貫いて書かれるのだろう。篆書ではその通りなのである。楷書でも「才」単独で使われるときはこのように書かれる。

ところがこれが旁となると話が違ってくる。

JIS には「才」の文字を含む漢字が 6 字ある。あげてみよう。

右の表をご覧いただきたい。

文字	意味	政令文字	ＪＩＳ収容
才	治水具、才能	常用・教育	X0208-1面26区45点
材	丸太、建築材	常用・教育	X0208-1面26区64点
財	たから	常用・教育	X0208-1面26区66点
豺	山犬	表外	X0208-1面76区25点
犲	山犬	表外	X0208-1面64区28点
鈭	鋭い	表外	X0213-2面90区50点

「才」と「才」を旁に持つ文字を集めてみた。でもよく字形を見てほしい。「鈭」を除くと「オ」なのである。「材・財」の 2 字は常用漢字(教育漢字)である。私は初め常用漢字で字体を省略した結果と思っていた。

手持ちの少ない辞書でしか確認していないが、「康熙字典(中華書局)」では例示文字は楷書体ですべて「オ」である。この影響を受けているのだろうが、国内の字典類も「オ」である。

「才能」の「才」を「オ」と書くことはない。楷書の世界でも突き出て書いてはいけないなんてことはないし、「小学校学習指導要領」では「才」については打ち込みが少し覗いている程度だが、第 3 画が縦棒の右から書かれている。

にもかかわらず小学校の先生によっては「才」も偏付きの「才」も「オ」と書かなくてはならないと教えている方がいるようである。たしかに子供たちに単独の「才」はつき出るが、「才」が構成要素にある時は出てはいけないと教えるのは辛いものがある。気持ちはよくわかる。でもどっちに転んでも子供は混乱するだろう。

「才」もともとは川の氾濫を防ぐための治水施設である。字形は甲骨文字では逆三角に縦棒(大阪市の市章であるミオツクシに似ているかも)で篆書では「才」そのものである。この篆書の形を見ると実に構造的によくできている。第 3 画は支え棒である。この棒は縦棒に縄でくくられている。安定して縛るにはやはり縦棒に交叉してなくてはならない。水圧を受けて壊れてもまた縛りなおせばよいように。

才の甲骨文

才の篆書

ところが「オ」とすると十字の棒にほぞを切って組み立てなくてはならない。作るのに金はかかるし、壊れやすい。壊れたら最後元通りにはできない。緊急で補修すると結局「才」の形に縄で縛り上げることになる。だったらやっぱり「才」だろう。「才」の字が構成要素になっている文字ではすべて「才」にしてしまえばいいのじゃないかと思うのだが、この意見はちょいと遅かったかも。

この著作権は岡和男に帰属します。
©Kazuo Oka 2000